

売薬の意匠あれこれ 〈その29〉 暖簾

一般社団法人 北多摩薬剤師会会長 平井 有 (ひらい・たもつ)

「売薬の意匠あれこれ」では江戸期から昭和期にかけての紙で出来たチラシ、ビラ、ポスターなどの広告を紹介してきました。

今回はそれら紙のチラシやビラなどよりも長い期間店頭において広告の役目を果たす目的で作られた主に布で作られた暖簾(のれん)を取り上げます。

医薬分業、処方箋調剤が普通の風景となった現代では、街でスタンドに立てられた「調剤薬局」「処方せん」などと染め抜いた大型の「のぼり」をよく見かけますが、今回取り上げます暖簾の歴史は平安時代の保元の頃(1150年あたり)にはすでに町屋の

入り口に屋号や商号、家紋などを染め抜いた横に長い形の暖簾が使われていたようです。

暖簾には日よけを目的としたものや、布の代わりに縄を垂らしたもの(縄暖簾)などがありました。そして暖簾の派生型として宣伝を目的に暖簾に商品名などをデザインして店頭に掲げる小型の暖簾が多く、メーカーによって作られました。今回は小型の広告暖簾を紹介します。なお暖簾には現代でもよく使われる「のれん分け」という言葉の他にも、不名誉な「暖簾を下す」「暖簾をたたむ」のような用語もあり「暖簾に傷をつける」ことのないように注意したいものです。

①「リーケン」

「リーケン」はめまいや吐き気、メニエール病などの治療に用いられる鎮暈剤(ちんうんざい)の中でも、現代ではセンバアやトラベルミンなどの乗り物酔いの止め薬に該当するいわゆる「酔い止め」の薬です。

暖簾下部に汽車が描かれていることや、価格が円以下の銭(¥.25)とあることから戦前の薬であることが伺えます。

②「金匱(きんぎ)救命丸」

江戸時代には道中薬(旅行中の気付けに用いたりする薬)であった「金匱救命丸」は、明治期になり小児の五疳薬(気付けや夜泣き、疳の虫など)として小児にターゲットを絞り販売、全国展開をしました。その後配置売薬を含め多くの類似「〇〇救命丸」が販売されたこともあり、昭和4年(1929)に名称を「小児良薬 宇津救命丸」と改め現代に至ることになります。よってこの暖簾はそれ以前のもののということになります。

③「ネットル丸」

1894年に創業した丹平商會。現代では丹平製薬と名称を改め歯痛の治療薬「新今治水」や便秘薬「健のう丸」、水虫・タムシ治療薬「アスター軟膏」などを製造している大阪の製薬会社です。

名は体を表すのごとく特に売薬は効能や効果を現すようなネーミングを付けましたがネットルは「熱(を)取る(去る)」の意で、「なつを去り かぜを治す」と変体仮名で効能が謳われています。

④「ホシ胃腸薬」

現「星薬科大学」の前身の星製薬商業学校を大正10年(1921)に設立、その基礎となる星製薬株式会社を明治44年(1911)に設立した星一は、一時期全国に3万8000店もの特約店を組織したり、100種類もの医薬品を製造しましたが、その主力製品がこの「ホシ胃腸薬」(通称「赤カン」)で創業当初は売り上げの半分以上も占めていたようです。

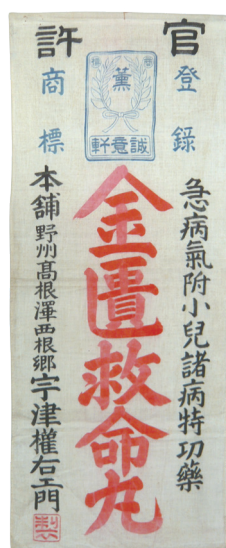
⑤「フマキラー」

大日本除虫菊(KINCHO)やアース製薬とともに日本の代表的家庭用殺虫剤メーカーである「フマキラー」の歴史は明治23年(1890)の天下回春堂にまでさかのぼる歴史のある会社ですが、この暖簾広告にはピン詰めで売られていた「フマキラー」殺虫剤(液)を専用のスプレー(霧吹きのようなもの)で吹く姿が描かれています。(構造上逆流して吸い込むことはありません)

このような時代のはじめには手動の手押しポンプ式の器具、さらに近年ではフロンガスなどによるスプレー式缶の殺虫剤が開発されることになります。



①



②



③



④



⑤